
青春アウトサイダーズ

灯月 憂雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青春アウトサイダーズ

【Nコード】

N7009V

【作者名】

灯月 憂雅

【あらすじ】

偏差値74のエリート高校生 高槻相真が入学したのは世間に掃き溜めと言われる天下一のバカ学校？晴嵐高校？だった
そこにいるのはヤンキー、暴走族、ギャル、落ちこぼれ、オタク以下略な人間たちと美少女と名高い幼馴染みの白羽瑞妃だった…

1 日常の朝

世の中どうしようもない事ばかりだ。

例えば目覚まし時計をセットし忘れたり。

例えば布団を蹴ったまま寝て足がびっくりするほど冷えていたり。

例えば妹にドロップキックをかまされて最悪の目覚めを迎えたり。

例えばそんなことが同じ日の朝に起こったり。

「おにーちゃんおーきてー！！ご飯作ってー！！」

ドスウン！！

「ぐぶうつっ！」

鈍い音と俺の悶絶の叫びが部屋に響いた。

こんな凶暴な方法で俺を目覚めるところか永眠させかねない奴は間違いない俺の妹だ。

「朝からいきなり元気なダイビングすんじゃねえ、殺す気か！！」

そついう俺も朝から元気に妹、高槻たかつきい一花いちかを怒鳴りつけた。既に制服に着替えてスタンバイOKだ。

「はやくしないと遅刻するもん、だから早く！」

という訳で俺はベッドから起きあがり、台所へ向かった。

たまには自分で作れよ。

俺の名前は高槻相真^{たかつき そうま}。どこにでもいるごくごく普通の青少年だ。いや、強いて言えば勉強はまあまあ自信がある方だが。

親は何の仕事をしているのかもわからない父親だけなので朝食作りは基本的に俺の仕事だ。

その辺の事情は父親に聞いてもいつも適当にごまかすか聞こえないフリをするか

狸寝入りをして断固 答えようとしない。

どうせだらしのない親父のことだから逃げられたのだろうと思うが。

仕事についてもエリート官僚だのコンビニのバイトだの大企業の社長だの自宅警備員だの聞きたびに

答えが変わってまともな返答をもらったことがない。なので小4くらいから周りの友人と大人には

「父は広告代理店をしています」と答えている。

そうこうしている内に俺は朝食を作り終えた。

白ご飯にみそ汁、卵焼きが高槻家の定番メニューだ。たまに プ
ラスアルファで焼き魚が付くがあくまで

休日だけの特別メニューだ。

「いただきます」 一花は手を合わせると猛烈なスピードで朝食を平らげ、

矢のようなスピードで家を出た。 一花は県外の私立校に通っているためいつも朝は早い。

俺も朝食を食べることにした。早く食べ終えて洗濯物を干さなければならぬ。俺の朝はいつも家事を

している間に終わるのだ。ようやく家事が一段落してそろそろ家を出る時間という頃、玄関のチャイムが

鳴った。

2 俺の学校は

「そーくんおはよー」

インターフォンから聞こえたのは隣に住む白羽瑞妃しろはなみずきの声だ。俺

たちは一応

幼なじみというやつで生まれた病院から保育園、幼稚園、小学校とずっと一緒だった。家も同じマンションの隣の部屋だ。

しかし瑞妃は私立の中学に入学したので公立中学の俺とはほとんど会う機会もなかった。だが偶然にも

同じ高校に進学したので今日から一緒に登校することになった。

「ねえそーくん、早く行こうよ」

俺はインターフォン越しに

「おう」

と答え、学ランを羽織って一応父の部屋を覗いた。案の定父はパ
ンツ一丁で爆睡してやがった。

「俺はそろそろ行くからな。メシは置いてるから温ためて食ってくれ。あとパジャマ着ないと寝冷えするぞ」

と言いつつ部屋を出た。

「悪いな瑞妃。待たせたか？」

「ううん、そんなことないよ。はやく行こつ。」

余談だが幼なじみの鼻屑目無しに見ても瑞妃は可愛い。確か小学校の時から他の子より群を抜いて

可愛かったし 中学でも他校の女子の話になれば必ずといって
いほど瑞妃の話が出た。それぐらい目立って

いた。だから俺はこうして二人で登校するのが嬉しいし、またちょ
つとした自慢でもある。

だが

「ちゃんと弁当持ったか？傘は？今日は降水確率70%って言ったぞ」

「ふええっ！？待って……………お弁当忘れた！」
瑞妃は慌てて隣の部屋に戻った。

これだから瑞妃は目を離せないのだ。瑞妃は天性のドジセンスの持ち主で放っておくと 忘れ物する、

階段で転ぶ等々いろいろなことをやらかすのだ。

「ひゃあっ」

そう、何も無いところで転んだり……………。

瑞妃が戻ってきたので俺たちは二人で家を出た。ここから学校まではさほど遠くないので徒歩である。

そんな二人を数台のバイクが追い越していった。そして徐々に同校の生徒も見えてきた。皆目付きの悪い奴

ばかりだ。そして俺たちは学校の前に来た。そこにはいつも通りの風景が広がっていた。

校門の近くでは朝から煙草を吸っている男子学生が数名。

校庭では何台ものバイクが元気に走り回っていた。俗に 族車 と

呼ばれるシロモノだ。

マフラーを抜いて騒音全開、良い調子のようだ。

さらにその脇では特効服を着た連中が怒鳴りあっている。

どれもこれも高校の風景ではないように見えるだろう。

しかしここもれっきとした高等学校なのだ。

この学校の名前は晴嵐せいらん高校という。

3 入学式

晴嵐高校

偏差値28

ここは様々な別称を以て人に知られている。

高校生からは“日本一のバカ高校”として。

高校受験を控えた中学生からは“受験生の墓場”として。

教師からは“流刑場”として。

そして世間からは“掃き溜め”として。

それが俺の入学した高校だ。

「ねえそーくん、今日は何するんだっけ？」

「ようやく族車の喧嘩がおさまってきたところで瑞妃が聞いた。」

「たぶんクラスでいろいろ決めたりするんだろ。まだ二日目だからな。」

「普通なら学級委員を決めたり班を組んだりするのだろう。普通ならば。」

「だがこの学校で普通などあるわけがない。」

「昨日の入学式にしてもそうだ。出席してる奴は俺と瑞妃を除けば十人もいなかった。」

「閑散とした体育館の壇上にいるのは白髪頭の校長だ。やたらと高級そうなスーツを着た校長の話もぶっ」

飛んでいた。

まず出席している生徒を見渡すと

「うむ、今年は出席者が多いな。去年の出席者は二人だった。」
もったいぶって頷いてみせる。

「えー、諸君も知つての通りこの学校にいるのはバカとロクデナシだけだ。そのことをしつかりと念頭に置いておくように。あと廊下での喫煙は灰皿がある場所以外は禁止だ。」

と言うと校長はさつさと壇から降りた。

その後も出席していた教師が途中で帰りだしたり上級生と思しき連中が乱入したりで混乱を極めたので、

俺も瑞妃を連れて途中で帰った。

なので今日も何が起こるかはわからない。

ちなみに俺と瑞妃のクラスは一年二組だ。クラスは全部で三クラスと高校にしてな少ない。

「昨日は途中で帰っちゃったからクラスの人と会つのが初めてだね」

「ああ」

ウキウキと楽しそうにしている瑞妃とは対称的に俺の顔は暗い。

瑞妃がいなければ今すぐにでも帰るところだ。廊下の反対側からすげえガン飛ばしてる奴とかいるし。

「そういえば昨日の入学式に来てる人少なかったね。みんなどうしたのかな？」

さぼって遊んでいるに決まっている。だが瑞妃は全く気づかないよ
うだ。

俺もあえて何も言わなかった。

4 クラス分け

教室も予想通り惨状を呈していた。壁も机も落書きだらけだ。どうしてヤンキーというやつはそこら中に一般人に理解不能な模様をえがくのだろう。

生徒の服装も私服の奴からジャージの奴、チエーンをジャラジャラつけた奴と様々だ。もちろん髪が黒い生徒もほとんどいない。つまりところまともな格好をしているのは俺と瑞妃だけなのだ。

「へえ〜みんなおもしろい格好してるね」
仰る通りです。

その時近くを通りかかった奴が俺に肩をぶつけやがった。
こりゃダメだ。

「おい、お前何ぶつかってんだよ」
ぶつかってきたのはお前の方だろうが。

相手にするのめくだらなかつたので俺は無視してやった。

「おい何シカトぶっこいてんだよ。何か言えよ」
瑞妃が横でオロオロしていたが俺は視線を目の前のヤンキーに集中させる。

別に瑞妃の前だからということもないが、ここで引き下がりがたくない。

「……チッ」

ヤンキーは舌打ちすると教室から出て行った。

もしかしたら俺の見た目があまりにこの学校とそぐわなかつたかもしれない。

荒れた学校にも平等にチャイムが鳴る。

だが席に着こうなどと考えるのは俺たち二人ぐらいのものだ。

「おいコラ席着けよ」

不意に教室の前のドアが開けられた。

立っていたのは腹巻き付けたイカツいオッサンだ。片手にはスポーツ新聞、もう片方には缶ビールだ。

休日気分かこいつは。

生徒も生徒でそんなことは微塵も気に掛けない。

「座れつつつてんのが聞こえんのかジャリどもが!!!」

うわあこええ。まるでヤクザだよ。

さすがの生徒も渋々席に座る。

「俺は春日鉄郎かすがてつろう。このクラスの担任をするモンだ。」

あまりの迫力にビビって話を聞く生徒、担任の目の前で爆睡する奴人それぞれだ。

「こんな学校だがお前らには出来る限り真面目に学校生活を送りトラブルを起こさないで欲しい。何故だかわかるか?おい」

「ばすん、と間の抜けた音を立てて春日は爆睡野郎を新聞で叩いた。しかし爆睡は狸寝入りなのか本当に寝ているのかわからないが、とにかく起きない。」

春日も諦め

「まあ理由は始末書を書くのが面倒だからだ。学校の備品を壊した時は随分前に廃止された。いちいち書いてもすぐ壊されるからな。でも補導された時は色々な書類を揃えなきゃならん。それとムシヨにぶち込まれた場合も同様だ。お前らもブタ小屋の世話にならんよう気をつけるんだな。」

生徒が生徒なら教師も教師だ。この学校は。

「この学校でのルールは三つ。煙草を吸う者は携帯灰皿を持つこと、ポイ捨ては厳禁だ。二つ目は

ヤクをやるらないこと。見つかった場合は即退学だ。でない俺のクビが飛ぶ。三つ目はさっきも言ったが
ポリ公の世話にならないことだ。もし捕まったら出所した瞬間に殴って退学にしてやる。」

腹巻き強面教師 春日鉄郎は缶ビールを開けた。

「以上だ」

ぐいっと一飲み。気持ちの良い飲みっぷりだ。

5 学級委員

「それともう一つ」

腹巻きヤーさん風教師こと春日が言う。

「一応学級委員が必要なんだが希望者はいるか？」

こんな学校にも学級委員なんてあるんだな。俺は一人で密かに感心した。

てか誰が出るんだよ。

が、

「はいはい希望するでえ！」思わぬところに馬鹿がいた。

その学級委員希望者は頼まれもしないのに教壇に上がった。

外見は一言で言うなら軽薄な男だ。腰の周りにチエーンを付け、掛けている黒縁メガネははどう見ても伊達だ。

一応制服を着ているが着こなしがまたチャライ。

極めつけは何と言っても髪だ。ド金髪にピンクのメッシュが無意味に長い襟足に入っている。

金髪軽薄男は勝手に喋り出した。

「ボクは大道大和^{だいどうやまと}。生まれも育ちも大阪や。みんなヨロシク頼むで。」

流暢な関西弁。

そして

「ボクはただの人間に興味はない。こんなかにうちゅうじ…」

「誰が演説しろと言った。」春日の新聞スイングはピンクメッシュの頭にクリーンヒット。

この男は演説の意味に気付いていないようだ。聞いている生徒も何のネタなのか解る奴はいまい。

俺は大和が何を言わんとしていたのか解ったが。

一応言っておくがこれはあくまで友人の影響だ。

「他の奴はこれで良いか？」春日が生徒に尋ねた。何人かはやる気

なさそうに頷いた。このクラスにしては良い反応だろう。

「では決定だ」

春日は腹巻きに新聞を収めて出て行った。

「えー学級委員としてまずは……」

「言い忘れてたがこれ配つとけ」

春日は大道に何かの書類の束を押しつけて出て行った。

「えーっと、これは入試の全国順位やね」

数年前から公立高校の入学試験は全国で統一された。更に入試結果は文部科学省が集計し偏差値でランク付けされている。

当然ながら科目は今までの5教科だが、1教科あたり1000点になっている。

この徹底したランキング制度により日本の学力は大幅にアップしたという。よくこんな非道な体制に文句が出ないもんだ。

俺の高校には全く関係のない話だろうが。

大道が俺の机にプリントを置いた。

俺の結果は、

高槻相真

総合得点 4988点

偏差値 74

全国順位 11位

俺としてはまずまずだ。

前回から少しランクが落ちたのが難点だが。

「そーくんどうだった？」

「前よりちよつと落ちたかな」

瑞妃に俺はプリントを渡した。

「うわあーやっぱりすごいねえ」

駄目だと思いつつも俺はつい瑞妃のプリントをチラ見してしまった。

白羽瑞妃

総合得点 485点

偏差値 27

全国順位 240294

確か今年の受験者数が23、4万人だったはず。

何だか……もの悲しい。

周りの奴らの成績も大して変わらなかったがな。

総合得点400点台ってどうやったら取れるんだよ。自分で言うのも何だが俺は頭が良い。そして性格が悪い。性格に関しては全くの無自覚だが。

「偏差値74！？キミどしたん！？」

- ざわっ

教室にいた連中が一斉に俺の方を向く。おいおい、リアルにざわめき起こったぞ今。

みんなの視線が痛い。

騒ぎの主は俺の後ろに立っている。見なくてもわかる。この関西弁野郎が。

「しかも全国順位11位で……なんかの間違いちゃうん？」

もう喋らないでくれよ。ピンク頭。間違いでもねーし。「間違いじゃねーよ。ちゃんと俺の名前書いてるだろ」

「あ、ホンマや。」

大道が間抜けな声をあげた。もう誰かこいつ黙らせてくれ。

6 学力底辺校の授業

入学式から一週間後。

どうやら大道の発言は予想以上に広まっていたようだ。学校ではだいたいの奴に二度見されるしヤンキーは声を潜めることもせず俺の噂話をあたりにまき散らしてやがる。

まったく人の噂は恐ろしい。

俺は後ろ指指されるようなことなんか何一つしてないはずだよな。

瑞妃はいつも通り騒動の意味をわかっていない。

俺はため息をついて教室へと入り自分の席に着いた。

今日で一週間なので晴嵐高校独自のリズムが掴めてきた。

まず授業だがこんな学校でも一応授業というものは存在するようである。出席している奴は意外にも多い。

だが授業内容自体が俺にとっては死ぬほど易しいのだ。

数学の第一回目の授業は『正と負の数』。

そう、中学校の数学で一番始めに勉強するアレだ。

もはや復習とかそんなレベルではない。担当者誰だ？完全になめてるだろ。

「もっかい説明してくれ。わかんねー」

「なんでマイナスがついてる数字は足し算しても大きくならないんだよ!？」

……晴嵐なめていたのは俺の方だったみたいだ。天下一のバカ高校の名は伊達じゃあなかった。

数字担当の教室はかなりのご老体で生徒の抗議をよそに黙々と黒板相手に説明を続ける。

「オイジーさん、何とかしろよ」

「わからのやったら高槻に訊いたらええんとちゃう?」

でたよ。このチャラ男学級委員また余計なことを。

「君、わかるのかね？」

その言葉にご老体まで反応した。

「…逆に高一で何故わからない」

「あーわかるんだったら変わりにみんなに説明してあげてね。」

まあいいか。どうせ俺も聞いているだけじゃ暇だし。

俺はご老体が変わってチヨークを握り教壇に立った。「えーっと、

みんなどこがわからないんだ？」

「そもそもマイナスの意味がわかんねーよ」

一人が即答。そっからですか。

ヤンキー恐るべし。

「マイナスってのはゼロを基準にみた数字の大きさで…」

このあと俺は延々15分正と負の数について説明した。お陰で授業が終わるころにはほぼ全員が理解できるようになった。

「そーくんお疲れ様。のど飴いる？」

「ああ、ありがとう」

俺に瑞妃が飴を持ってきてくれた。瑞妃は天然なのだが優しい。幼なじみが美少女で天然で優しいなんてひょっとしたら俺はかなりツイてる人間なのかも。

「ホンマさっきのわかりやすかったわあ。やっぱ頭のいい奴は違うなあ。」

前の席の奴が振り向いた。声の主は予想通り大道だ。「逆になんてわかんねーんだよ。お前ら絶望的だぞ。ってゆーかホント致命的だな。これからの人生心配するぞ」

「はつきり言うなあ。なんちゆうてもここは天下無双の晴嵐やからな。しゃーないんちゃう？それにどうせみんな頭使う仕事なんかせえへんしな」

「そういえば大道は大阪出身なんだよな？」

「そやで。ボクは大阪市出身」

相真は気になっていたことを訊いてみた。

「その時からそんなにチャラかったのか？」

「まあな。でもボクの地元もつとすごいで」

「みんなそのV系バンドのなり損ねみたいな格好なのか？」

「高っちゃんかなかな言うこときついんやな……」

「そうか？」

7 俺のクラスの愉快的仲間達

「あともう一つ気になってたんだが」

そう、俺がさつきから一番気になっていたこと。

「そのフィギュアは何なんだ？」

俺は大道の机に置いてある奇怪な物体を指差した。

パツと見は普通のアニメのフィギュアなんだろう。

日曜日の朝にやってそうな魔法少女的な女の子だ。衣装が微妙に扇

情的なのはまだいい。何故か少女は先が膨らんだ筒のようなものを

担いでいた。しかも身の丈に合わない大型バイクに跨っているのだ。

「これか？聞いて驚くなかれ。これは『みりたり魔法少女 ぱんつ

ああ・ふあうすと』のマイカや！」

いやいや、そんなことや顔されても知らねーよ！

俺は心の中で一人ツッコんだ。

「パンナコッタ？」

瑞妃、それも違うよ。

「……で何なんだ、その『みりたりナントカ』ってのは？」

「簡単に説明するとお、魔法少女のマイカがホンダのマグナに乗っ

てパンツァーファウストで悪い魔女を撃破していく話や。」

「“パンツァーファウスト”って何だ？」

「……ドイツ製対戦車擲弾発射機。第二次世界大戦時にフーゴ・シ
ユナイダー社が開発。別名ファウストパトロネ」

突然俺の横の席の奴が喋りだした。

その女の子は妙な連中が集まった俺のクラスの中でも異彩を放って
いた。

眼鏡をかけたおとなしそうな子だった。髪はショートカットでこの
学校ではおとなしめの部類だろう。普通の高校で言うなら人付き合い
いが苦手ですつと本を読んでるようなタイプ。

だが、その子は一言で言うなら“変人”のオーラを纏っていた。そ

もそも“普通の女子高生”が『週刊銃の友』なんて雑誌をを読むだろうか？少なくとも俺はそんな女子高生は見たことがない。

おまけにその子が着ていたのは全身迷彩服だったからだ。いくら晴嵐高校でも戦場帰りのが来ている筈はないが……

「キミ詳しいな。もしかして『みりまほ』見てるん？」
大道が身を乗り出してきた。

ああ、みりまほってのはアレか。みりたり魔法少女の略称か。

大道の目が異様に輝いている。そうか、これが“同族”を発見したオタクの目か。

「……一応見た。軍事関係の描写がリアルって……聞いたから。俺の隣の迷彩ガールはぼそぼそと答えた。声が小さいから聞き取りにくい。」

「キミはマイカとサヨどっち派なん？」

「……私はパンツァーファウストの方が好き」

「やんな！やっぱりマイカやんな。ボクの知り合いみんなサヨ派やからさあ」

「……サヨのBARあんまり好きじゃないから。あの銃は分隊支援火器として使う必要性を感じない」

「あー二人ちよつといいか？」

「何やねん」

「……何？」

このままでは延々二人の会話に引きずられる。

そもそもこの二人途中から会話がかみ合っていないことに気づいてるのか？

「あなた名前は？」

俺は謎の軍事系少女に気になっていたことを聞いてみた。

「……桐生綾乃きじゅうあやの」

「なんで迷彩服なんか着てるんだ？」

「……趣味。……ちなみにスイス軍仕様」

つくづく変わった子だ。

「まったく訳がわからないよ、やな」
お前が言っつな。

8 校長室

「つと次の授業は……現代文か」

「スガちゃんやな」

スガちゃんというのは俺たち一年二組の担任教師“春日鉄郎”のことだ。

生徒だけでなく教師のやる気までもが著しく欠如した晴嵐高校だが、この男はそれとは真逆で不良たちにも真正面から突っ込んでいくタイプだ。逆らう者には古きよき鉄拳をお見舞いするらしい。

当然授業もちゃんとやってくれるので俺としてはありがたい。（ただし真面目に聞いているのは俺と瑞妃くらいである）

ちなみに俺のクラス内で春日を“スガちゃん”と呼んでいるのはこのチャラメガネのヲタ委員長だけだ。そんなことを考えている時不意にチャイムが鳴った。同時に教室のドアが開き春日が入ってきた。腹巻きに新聞を挟んだ休日の極道スタイル。

手にしている現代文の教科書がシニールだ。

「ほい号令」

「きりーっつ」

号令は学級委員である大道の仕事だ。

間の抜けた合図で何人かはのらりくらりと立ち上がった。

「気をつけーれい」

ある者は黙って、またある者は面倒くさそうに席に着いた。

「よし。じゃ教科書の26ページ開ける」

と言われて開けたのは俺と瑞妃の二人だけだった。

「さあて今日は……」

と春日が言いかけた所で不意にチャイムが鳴った授業の開始合図ではない。連絡放送が流れるときのやつだ。

『えー呼び出しのお知らせです。一年二組の高槻相真君。校長室へ来て下さい』おそらく声の主は数学担当のご老体だろう。

春日が訝しげに俺を見た。「何かやったのか？」

「何もやってませんって。俺に限ってあるわけ無いでしょう。」
俺は慚然とした態度で答えた。

「おいおい高つちゃん一週間で呼び出しかー？」

「黙れチャラオタ眼鏡」

大道を一蹴して俺は教室から出た。

あの人が俺を呼び出すとは一体何だろうか？

「入るぞ」

俺はノックもろくにせず校長室のドアノブに手をかけた。
だがドアは開かなかった。鍵が掛けられているようだ。

「おい呼ばれたから来たんだぞ、早く開けるよー！」
ガングンと激しくノックする。

すると中から「ちょっと待ってけ」とか何か言っのが聞こえた。続
いていくつもの鍵を開ける音が響く。

最後の鍵を開けられると中から白髪頭の男が顔を出した。

「おう相真。早く入ってくれい」

あまりの警戒ぶりに俺は思わず苦笑する。

「どんだけ用心してんだよ爺ちゃん」

9 爺くじじい

俺は晴嵐高校の校長もとい祖父の部屋に入った。

これまでに見た晴嵐の敷地内のどこよりもまともだったが、全体的に赤と金の色調でまとめられて成金趣味丸出しだった。

「別にここまで鍵つける意味なくね？銀行じゃあるまいし」

この部屋でただ一つ機能的なもの。それは頑丈そうで無機質なスチール製の扉だった。

高価な調度品が並ぶこの部屋にそぐわないそれには鍵が全部で7つ取り付けられている。

「何を言っとる。こうでもせんとあつという間に荒らされてしまうわい」

「まるでアルカトラス刑務所だな」

俺は冗談まじりに悪態をついた。

「で爺ちゃん、俺に何の用だよ」

「ふふふ、爺おじいが孫を心配するのは当たり前じゃろっ？学校はどうなんじゃ？」

「よせよ気色悪い」

俺は質問をはぐらかそうとしたが爺ちゃんは俺の顔を真っ直ぐ見た。

「真面目な話じゃよ。お前がこの学校で上手くやっついていけるとは思っとらんわい」

俺は爺ちゃんを睨んだが、諦めたように溜め息をついて来客用のソファーにどっかりと腰を下ろした。

「学校がどうかって？最低最悪だよ。ご推察の通り上手くなんてやっけるわけねえ。こんなひどい連中初めてだよ」

「・・・やはりな」

「やはりな、じゃねえよ爺ちゃん。まだ入学して一週間なのに何回不良に絡まれたか。この前なんか族車に轢かれそうになったしな」

「うっむむ」

「だからうつむ、じゃねえって。」

本当のことだった。ここに俺の居場所などない。そもそも生きる世界も価値観も全て正反対なのだ。

「俺の平安はどこにあるのかねえ」

俺は天を仰いだ。

「頂点に立てばよいじゃろう?」

「は?」

俺は爺ちゃんの言っている意味を図りかねた。

「お前が頂点トツポに立てば誰もお前に突つかからんじゃろうが」

「ちよ、待てよいきなり何を…」

「当然晴嵐の総大将に楯突く輩なんぞおらん。他校の生徒も皆お前の言うことを聞くぞい」

「アンタ自分が何言ってるのかわかってんのか!? ここはただの柄悪い高校じゃねえ。天下一の不良の溜まり場晴嵐高校なんだ。

俺みたいにクソ真面目に生きてきた人間が成り上がっていけないわけがねえよ!」俺は立ち上がって爺ちゃんに怒鳴りちらした。

「校長やってる爺ちゃんなら解るだろ!? 俺はあんな連中とはやっていけない。俺は……」

「やかましい! 甘ったれるな!!」

突然爺ちゃんが吠えた。「若いくせに自分に合わないだの上に乗立てないだのとつまらんことを抜かしおって。お前の言うとおり晴嵐は救えんクズだらけじゃ。不良が群雄割拠し未だ一つにまとまっとらん。ならばそれは逆にチャンスじゃろう? 誰も支配していないならお前にも充分可能性はあるということじゃ」

喋り終えてから爺ちゃんは俺があっけにとられているのに気付き、ばつが悪そうに頭を掻いた。

「すまん、つい熱くなつてしもつた。 - わしはただお前に……」

「わかった」

爺ちゃんは驚いて俺の顔を見た。

「とりあえずやれるだけやってみるよ。何ができるかわかんないけ

ど」

「……相真」

爺ちゃんはしばらく黙り込んだ。何か考えているようだ。俺が顔を覗き込むと爺ちゃんはゆっくり顔を上げた。

「来週に新入生歓迎会がある。まずはそこで勝ってこい」

「新入生歓迎会い？何だそりゃ」

「既に各クラスに連絡を回しているはずじゃあ。詳しくはそこで聞けい」

「……わかった」

釈然としなかったがこれ以上ここにいっても変わらないだろう。俺は爺ちゃんに背を向け部屋を出た。

それと同時に授業終了のチャイムが虚しく鳴り響いた。

10 敵対（前書き）

大変お待たせ致しました
十話目です

「……そろそろいいかな？いい加減俺も……」

「何言ってるの？もうちよつと付き合えよ」

茶髪のそいつはトイレの壁に手を付き通路を塞いだ。挑発的俺をじろじろ眺める目はギラギラと凶暴なエネルギーを放っている。

「オラ何か言えよ」

二人目の鼻ピアスの奴もうぜえ。

何故俺がこんな状況に陥ったかというと、

話は数分前に遡る。

校長室を出てから俺はトイレに立ち寄った。だがそこには先客がいた。数分後に俺に絡んでくる例の二人組だ。晴嵐高校ではトイレは本来禁煙だが、彼らは携帯灰皿も持たず堂々と一服していた。おそらく一年生だろう。

俺はこの高校では不用意に目を合わせるべきではないと既に学び取っていた。

とにかくさつさと用を足せばいいのだ。俺は無言で二人の脇を通り過ぎようとしたのだが

「おい見るよ。こいつってあの二組の高槻って奴じゃね？」

茶髪が俺のことを知っていた。

「マジで！？　これが噂の高槻なの！？」

二人目の鼻ピアスも食い付いてきた。

これはかなりのピンチである。てか噂ってなんだ噂って。

「高槻ってアレだろ？　高校入試の偏差値70以上の」

「そうそう。全国でも2ケタ入ってるらしいぜ」

「マジで！？」

このままでは延々と待たされそうだ。用を足すこともできない。

「あー、ちよつといいか?」「ああ?」

「いや、その……そこ空けてくれると嬉しいなあ〜なんて……」
「は?」

「だから、通路塞いでるし……」

「うつせーな。お前何言ってるの?」

「なんか文句あんのか?」

大アリだよ! と言ってやりたかったが、もしケンカになったら勝ち目はなさそうだ。

こんなやり取りが10分以上続くので以下省略する。

これが今回の顛末である。雲行きも段々悪くなってきた。

「大体お前ム力つくんだよ。なんで偏差値70超えてんのにこんな高校来たの?」「別に来たくて来たわけじゃ……」

と言いかけたが

「ゴチャゴチャ言ってるじゃねえよモヤシ!」

俺はいきなり茶髪男に胸倉を掴まれた。そのまま右手の拳を後ろに引いた。

殴られる。目を瞑って襲い来る衝撃に備えたが

「……あれ?」

おかしい。いつになろうなっても拳は飛んでこない。思いきって目を開けると目の前に拳があった。本当に目と鼻の先といった距離だ。

「うちのクラスモシの者に何手え出しとんねん」

茶髪男の腕を掴んでいたのは金髪ピンクメッシュの男 - 大道大和 - だった。大道は茶髪男の正拳突きを、茶髪の二の腕を掴んで止めたのだ。

その視線は普段の軽い態度からは想像出来ないほど鋭い。

茶髪は腕に力を込めたが、大道の手は微動だにしなかった。

「放せ」

「放すかアホ」

大道と茶髪男は腕を掴みながら睨みあつた。

ややあつて茶髪は強引に大道の手を振りほどいた。

「なんやビビつたんか？」 「新入生歓迎会の開会前に怪我させちゃフエアじゃないからな」

「随分でかい口叩くなあ。本^{ホン}当に自信あるんか、それともハツタリか？」

「バカ言うな。俺達1組には城咲、3組には蓮見と岩田がいる。2組にそれ以上の戦力があるのか？」

鼻ピアスも口を開いた。

「あんま調子に乗んなよ。こつちには秘策があんねん」

大道はそう言つと俺を強引に引つ張つていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7009v/>

青春アウトサイダース

2011年12月11日23時53分発行